

全国大学音楽教育学会会員各位  
関東地区学会会員各位

2021年9月28日  
全国大学音楽教育学会 関東地区学会  
会長 二宮紀子(学会印省略)

## 『2021年度 第2回研究会のお知らせ』(最終案内)

会員の皆様には益々ご健勝のことと存じます。

さて、全国大学音楽教育学会 関東地区学会 第2回研究会はコロナ事情を鑑みて、オンラインでの開催となりました。皆様のご理解を賜りたく存じます。どうぞ奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

記

### 2021年度テーマ 「これからの子どもの教育と音楽」～今、養成校が果たすべき音楽教育とは～

- 1 日時 10月9日(土) 13:00～16:40
- 2 会場 ZOOM開催
- 3 日程 12:40 入室開始  
13:00 開会  
13:00～15:00

パネルディスカッション「領域『表現』を他分野の指導者とともに考える」

企画・ファシリテーター：二宮紀子 (十文字学園女子大学・音楽部門)

パネラー：山本直樹氏 (長野県立大学・演劇部門)

名達英詔氏 (十文字学園女子大学・造形部門)

13:00～13:20 会長挨拶、今回の企画、パネルディスカッションの趣旨説明  
(音楽部門の話題提供を含む) パネラー紹介 二宮紀子

13:20～13:40 話題提供・演劇部門から 山本直樹先生

13:40～14:00 話題提供・造形部門から 名達英詔先生

14:00～14:40 参加者を交えての討議

14:40～15:00 話題提供者の先生方よりまとめの言葉

15:00～15:10 休憩

15:10～16:40 研究発表

- 1. 幼児の劇活動における保育者の専門性について 赤津裕子(竹早教員保育士養成所)
- 2. 小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働による授業実践の一考察  
—第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の実践事例を通して— 三沢大樹(常葉大学)
- 3. ピアノ実技指導での演奏動画を活用した指導法に関する研究  
—演習科目「初等音楽」での実践事例より— 氏家史人(日本体育大学)

16:40 閉会 ※情報交換会はありません

## 2021年度 関東地区学会第2回研究会(10/9 zoom 開催)

### 【参加方法】

①10/5(火)までに参加費振り込みをしてください (参加費 会員：1,000円/一般参加：1,500円)

振替口座 (ゆうちょ銀行)：00120-8-583389

名義：全国大学音楽教育学会関東地区学会

②振込後 10/6(水)までに事務局宛メールで参加申し込みをしてください

(件名は必ず「第2回研究会 URL 希望」としてください)

**①・②の順番を守ってください**

③入金と参加申し込みメールを確認後、10/7(木)以降に事務局より URL 等を参加申し込みメールに返信します

※振込用紙控えの他に領収書が必要な方は、会計担当まで連絡をお願いいたします

事務局：ryu.nakajima@nittai.ac.jp 中島龍一

会計：gv-saeko@mrg.biglobe.ne.jp 上野彩子

## ■パネルディスカッション「領域『表現』を他分野の指導者とともに考える」

### 【企画趣旨】

ファシリテーター：二宮紀子（十文字学園女子大学・音楽部門）

『保育要領―幼児教育の手引き―』（昭和23年）において、初めて「楽しい幼児の経験」として保育内容が制定された時、12種類の保育内容には「5音楽」と「2リズム」、「7絵画」と「8製作」にならんで、「10ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」が挙げられた。昭和32年、最初の『幼稚園教育要領』が制定された時、保育内容は6領域にまとめられ、「音楽リズム」「絵画製作」は残ったが「劇遊び」は姿を消してしまった。平成元年、子どもの表現を根本的に見直し、分野別にはなく大きな括りで捉え、表現の芽とも言える最初の発現にも目を向けようと領域「表現」が誕生した。しかし、子どもの表現とは主体的で未分化で総合的なものだとして理解しながらも、分野別に表現活動を捉え指導法を考えてきた現場や養成校が、領域「表現」を目指す子どもの表現理解を具体的な活動として捉えることは簡単ではなかったと言える。

領域「表現」への改訂から10年以上を経た平成14年に『保育学研究』の巻頭論文で、小林美実はいつまでも現場が変わらない理由を分析しながら、子どもの表現とは大人から教え込まれるものではなく、子どもにとって表す必然性のあるもので、楽しく遊ぶ時に現れるものだとして述べた。それによれば、幼児の表現の特徴は劇的な表現活動に最も顕著に見られるが、ここで言う劇は上演を目的とするシアターではなく、自分が表現することを楽しむ劇的活動ドラマであるという。このシアターとドラマという視点は、音楽の分野での表現活動を考える際にも大いに参考になるのではないと思われる。

音楽分野でも「教え込む」ことへの反発から、練習を伴う活動やシアターのように舞台上で演奏することを忌み嫌う一方で、楽しく正しく歌ったり楽器活動をしたり、それを披露する発表会を持つことへの躊躇いを払拭したいという思いと、そのような迷いには目も向けず、訓練のように練習し発表し、子どもが立派に音楽を演奏する姿に大人が歓喜するという現実が混在している。

今回のパネルディスカッションでは演劇部門と造形部門からパネラーをお迎えし、シアターとドラマをキーワードに子どもの表現をどう捉えるのか、子どもの表現活動に大人はどのように関わっていくものなのか、それぞれのお立場からお話しいただく。子どもの自発的な表現活動と、大人が関わって練習と呼ばれる内容を内在させる表現活動。対立するかに見える表現活動について他分野の専門家の意見を交えながら意見交換をし、理解を深めたい。

尚、今回身体表現の分野を外したのは、リズム活動という音楽と共通の活動を有する身体表現の分野とは、また別の機会を設けて深く話し合いたいと考えたためであることを付記する。

### 【話題提供1】

パネラー：山本直樹氏（長野県立大学・演劇部門）

子どもの演劇表現と大人の役割

演劇は、シアター（theatre）、ドラマ（drama）、プレイ（play）と多様な捉え方ができる。子どもの演劇表現は、プレイから始まる。現実とイメージの世界を行き来しながら、声と身体という自分が保有する精一杯の手立てで、内なるものを衝動的に表に現す。プレイは、他者との出会いによって、ドラマへと変わる。イメージの世界の中で同じ景色を感じ合える仲間と共に冒険したり、生活したり、戦ったりして、子どもは共振的な感覚を味わうのである。シアターは、ドラマのお裾分けである。自分たちのイメージの世界に観客を誘い、その仲間としてのひとときを提供する。

子どもがシアターをする準備に大人の関わりは不可欠である。それは同じ体験をしても一人一人の感じ方が異なる子ども達の主体性に任せても、お互いのイメージの調整や共有は難しいと考えられるからである。また、制作的な立場で考えれば、声が小さい子がいるならば、大舞台にこだわらずにいつもの保育室でもよいのではないかと。年に一回だけではなく、複数回、少人数で短いシアターに挑戦してもよいのではないかと。

そもそも原始的な演劇に純粋な観客はいなかった。子どもと交代し、今度は保育者や保護者が演じる番である。

## 【話題提供 2】

### パネラー：名達英詔氏（十文字学園女子大学・造形部門）

「シアターとドラマをキーワードに子どもの表現をどう捉えるのか、子どもの表現活動に大人はどのように関わっていくものなのか」この投げかけをいただいた時、「ごっこ遊びはシアターだろうか」、「私たちの世界は偶然に満ち、ドラマ的であるのに、なぜシアターが生み出されたのだろうか」といった素朴な問いが次々と浮かんできました。今回は、このような問いをもとに話題を提示させていただこうと思います。

初めに、シアターとドラマの位置づけを再現性と偶然性という視点から見つつ、シアターの・ドラマ的造形表現のあり方、造形表現が持つ対話性、問いを生むための問いとしての表現について述べます。

次に、造形活動の中での子どものドラマ的経験とその仕組みについて考えるとともに、シアターの表現の捉え方について、再現の対象とするか、環境とするか、問いのきっかけとするかという点から大人の関わり方について述べます。

最後に、「感じ、考え、表現する」をテーマに実践される十文字学園女子大学の造形表現に関わる授業についてご紹介しつつ、子どもの表現の捉えと大人の関わりを踏まえた保育者養成について述べます。

## ■研究発表要旨

### 1. 幼児の劇活動における保育者の専門性について

赤津裕子（竹早教員保育士養成所）

幼児期における劇活動は、幼児の即興性や自由な発想がのびのびと表現され、幼児の感性を育む大事な活動として多くの幼稚園で行われている。しかし新任保育者にとって、年間行事の中で最も負担と感じているのが劇の発表であるという。劇の発表は学級単位で行われることが多く、普段の保育の成果として学級担任の力量が問われるからである。また幼児主体の活動にしたいという願いと保護者の評価との間で葛藤も生まれる。さらに、日ごろ楽しんでいる「ごっこ遊び」を発表会につなげたいと思いながらも具体的な手立てを持っていないこともある。これらの問題意識から再度、幼児が劇活動をとおして何を経験しているのかについて問い直してみたいと考えた。そこで幼児の主体性を生かした劇活動をめざしている幼稚園と連携し、幼児の具体的な姿と保育者の働きかけからこのテーマについて考える。さらに保育者養成において、学生に何を伝えるかについても考察したい。

### 2. 小学校音楽科に於けるゲストティーチャーとの協働による授業実践の一考察

#### —第1学年「映像資料を教材化した音楽鑑賞」授業の実践事例を通して—

三沢大樹（常葉大学）

本発表は、大学教員である筆者がゲストティーチャーとなり、小学校教諭と協働で実施した音楽鑑賞の授業の実践報告である。

新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが謳われており、その実施に当たっては、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったり、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させることが示されている。音楽科では、これまでも地域のゲストティーチャー（人的資源）との協働による実践や、公共文化施設、財団、大学等が主催する「音楽アウトリーチ」活動を活用する等した、演奏家（音楽家）をゲストティーチャーとして学校に迎え入れる等の実践事例の報告が、比較的多くされてきたものと思われる。

この度筆者は、所属学部の附属小学校第1学年22名を対象に、映像資料（ディズニーのアニメーション

映画「ファンタジア 2000」より)を教材化した音楽鑑賞の授業を計画・実施した。当日の発表では、授業後に児童が記述したワークシート(感想)に見られる特徴の分析等を通して、本授業実践に於ける学習の成果等を整理する。

### 3. ピアノ実技指導での演奏動画を活用した指導法に関する研究

#### -演習科目「初等音楽」での実践事例より-

氏家史人(日本体育大学)

保育士、幼稚園・小学校教員養成でのピアノ教育はなくてはならないものだと考える。大学での授業やそれ以外の時間で、学生がピアノの練習をしている光景を見るが、近年、学生の自主練習の際などに曲の知識や演奏技能を習得するために、動画共有サイト(YouTubeなど)を使用している学生が散見された。動画共有サイトには様々な演奏動画が存在しているが、学生自らで動画を選別し、自分なりの解釈で練習の参考にしていた。また授業の中でも、お手本として教員にピアノ演奏をお願いし、その演奏を自らの携帯で撮影し、それを見ながら練習する学生が多くいた。

本研究ではこの事例に着目し、ピアノの実技指導において教育的配慮のある演奏動画を作成・活用することで、学生のピアノ演奏技術を習得する手立ての一つとなるのではないかと考えた。そこで今年度前期に対面で開講した演習科目「初等音楽」でのピアノ指導の際に、演奏動画を使用した指導を今回は初心者に限定し、実践した。

《第3回研究会のお知らせ》

2022年2月27日(日) 13:00~

(開催方法:原則インターネット配信、コロナ状況を鑑みて実施方法を検討していきます)

会場:汐留ベヒシュタインサロン

内容:演奏口頭研究発表

詳細は同封の第3回研究会募集要項をご覧ください

★ホームページで各地区最新情報をごらんください。<http://nacome.com>